風俗文選

記紀
序

五

へ 5
5700
5

門 へ3
號 5693
巻 1

い57279

京都大學圖書

記

勝俣氏旧蔵書

落柹舎記　去来　幻住菴記　芭蕉
十八楼記　芭蕉　五老井記　許六
九華亭記　汶村　琵琶亭記　許六
風臺水臺記　許六
附 紀行
鹿嶋紀行　芭蕉　南行紀　李由 許六

風俗文選巻之五

五老井 許六 選

○記類

落柹舎記　去来

○嵯峨にひとつの古家侍る。そのほとりに柹の木四十本
あり。五とせ六とせ経ぬれど。このみも持来らず。代がゆる
まさもきこえねば。雨風に落されても。主一あれば。生涯が志るしも
もちよ。若者は篤にさら綿あれば。天乃帝のめぐみをまた
に待るむしく屋敷に行人をまねいて。そのかわりをかね。
ましハ庭乃木がしこくいてめぬ。おかしこやこゝに
商人の来りて。立木にかい延めむとて。一貫文さしおし

恨びかつ泣ぬ。手ハ猶そこに出てゆきかゝるにころなと
御経をしはらくと座よつゞけて題。それゟ筆
もやすむれバ。高人のつん笄書つけ。猶すゝくと并添
ぬ。此むすめ鬟乃比よりおもひ白鬟生るまでも打業とし
侍るを。かくぞ覧しめるまゝ樗をうんで。此の末の価のへし
それまでひやゝ。終をと後に書き侍べりゆるしやわぬ。君
乃かへりまふ。あるちの涙ハ消息遣るとて。それゟ落ち樗
今のまわを書て見える。
樗ねぶやまと乗てちりにあをし　山

幻住菴記

芭蕉翁

○石山乃奥。岩間のうしろ尓山あり。国分山と云。その
かミ国分寺乃名を伝ふなるべし。麓尓細き流を
渡りて翠微尓登る事。三曲二百歩尓して八幡
宮たゝせ玉ふ。神体ハ弥陀乃尊像とかや。唯一の家
尓ハ甚忌なる事を。両部光をやはらげ利益の塵
を同じうし給ふも又尊し。日比ハ人乃詣
ざりければ。いとゞ神さび物しづかなる傍尓。住捨
し草の戸あり。よもぎ根笹軒をかこみ。屋ねもり
壁落て狐狸ふしどを得たり。幻住菴と云。あるじ

乃僧何がしハ勇士菅沼氏曲翠子の伯父になん侍りし
を。今ハ八年ばかりむかしになりて。正に幻住老人の
名をのミ残せり。予又市中を去る事十年ばか
りにして。五十年やゝちかき身ハ。蓑虫乃みの失ひ。
蝸牛家を離れて。奥羽象潟の暑き日に面をこが
し。高すなごあゆミくるしき北海乃荒磯にきびすを
破りて。今歳湖水の波にたゞよひ。鳰の浮巣乃
流とゞまるべき蘆の一本の陰たのもしく。
軒端茨あらため。垣ね結そへなどして。卯月の初
いとかりそめに入し山乃。やがて出じとさへおもひ
そミぬ。さすがに春乃名残も遠からず。つゝじ咲残り

山藤松にかゝりて。時鳥しば／＼過る程。宿かし鳥
乃便さへあるを。木つゝきのつゝくともいとはじなど。そゞ
ろに興じて。魂呉楚東南にはしり。身ハ瀟湘洞
庭に立。山ハ未申にそばだち。人家よき程に隔
り。南薫峯よりおろし。北風海を浸して涼し。
日枝の山。比良の高根より。辛崎の松ハ霞こめて。
城あり。橋有。釣たるゝ舟あり。笠とりにかよふ
木樵の声。麓の小田に早苗とる歌。螢飛かふ
夕やミの空に。水鶏のたゝく音。美景物としてたらずと
いふ事なし。中にも三上山ハ士峯の俤にかよひて。武
蔵野の古き栖もおもひいでられ。田上山に古

人をかぞふ。さゝほが嶽。千丈が峯。袴腰といふ山あり。黒津の里はいとくらう茂りて。網代守るにぞとよみけむ万葉集乃姿なりけり。猶眺望くまなからむと。後の峯に這のぼり。松乃棚作り。藁乃円座を敷て。猿の腰掛と名づく。彼海棠に巣をいとなみ。主簿峯に庵を結べる王翁。徐佺が徒にはあらず。唯睡辟山民となりて。孱顔に足をなげ出し。空山に虱を捫て座す。たまたま心まめなる時ハ。谷の清水を汲て自炊ぐ。とくとく乃雫を侘て。一炉乃備へいとかろし。はた昔住けん人の。いと心高く住なし侍りて。たくみ置る物ずきもなし。持仏一間を隔て。夜の物おさむべき所などいさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は。加茂の甲斐何がしが厳子にて。此たび洛にのぼりいまそかりけるを。ある人をして額を乞。いとやすやすと筆を染て。幻住庵乃三字を送らる。頓て草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ旅寝といひ。さる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠。越の菅蓑ばかり。枕の上の柱に懸たり。昼ハまれまれとぶらふ人々に心を動し。あるハ宮守の翁。里のおのこ共入来りて。いのしゝの稲くひあらし。兎乃豆畑にかよふなど。我聞しらぬ農談。日既に山の端にかゝれば。夜座静に月を待ては影を伴ひ。燈を

賦してうて罔両に是非をこらす。かくいへばとて。ひたふるに
閑寂を好み。山野に跡をかくさむとにはあらず。やゝ
病身人に倦て。世をいとひし人に似たり。つら〳〵
年月乃移こし拙き身の科をおもふに。ある時は仕
官懸命の地をうらやみ。一たびは佛籬祖室乃扉に入ら
むとせしも。たよりなき風雲に身をせめ。花鳥に情を
労じて。しばらく生涯乃計とさへなれば。終に無能
無才にして此一筋につながる。楽天ハ五臓の神をやぶる。
老杜ハ痩たり。賢愚文質のひとしからざるも。いづれか
幻乃栖ならずやと。おもひ捨てふしぬ。

先たのむ椎の木もあり夏木立

十八楼記

芭蕉翁

○みのゝ國ながら川に望て水楼あり。あるじを加島
氏といふ。稲葉山後に高く。乱山西にかさなりて。
ちかゝらず遠からず。田中の寺ハ杉乃一むらにかくれて。
岸にそふ民家ハ竹乃かこみのみどりも深し。曝布
所々に引はへて。右に渡し舟うかぶ。里人行かひしげく。
漁村軒をならべて。網をひき釣をたるゝ。おのがさま〴〵
も。たゞ此楼をもてなすに似たり。暮がたき夏の日もわする
ゝばかり。入日の影も月にかはりて。波にむすぼるゝかゞり
火の影もやゝちかく。高欄のもとに鵜飼するなど。誠に

めざ阿しおえんあなれるらし。かの瀟湘乃八(ヤツ)乃ながめにも
西湖乃十(トヲ)の境(サカヒ)も。涼風一味乃うちにおさめぬべきね。
ここに此楼に名をいはむとならバ。十八楼ともいはまほし
きなるを。

此あたり目にみゆるものは皆涼し

五老井ノ記

許六

○霊泉ある所。水乃きよくゆたかなり。纔(ワヅカ)に五尺あまりにして。一千
尺乃魚池よりおのづからわき出る。清く溜(タマ)りあふれ。五老井と
名づく。別墅をひらきて。五老が庵を結ぶ。主人姓ハ森。名ハ
許六。号ハ五老井先生と称す。五老ハ予が別号也

驛(ヤ)が原不知哉(イサヤ)川おし移りて。鳥籠(トコ)の山南に近し。比良乃
体躰をうつし。伊吹の嵐を鎮むるところなり。遥(ハル)かに剣(キク)。東海道
堤の霜。陽を坂面に照らしめ。傍の村ふかし。霊泉を五
に汲ぐ。風雅乃匂ひを。葎(ムグラ)の中にとどめむとなり。其水
乃清きことハ。恵山乃泉脉を通じ。其きることハ粛州の金
泉に比し。茶出る所乃翁。白鼓の茶をさげてこれん猿(コノカミ)
四時の洗濯を書かずといへども。一とせの月なおほく
泉を設よることハ。其麦を引とん。霍(カク)山鳴が井。盤(バン)乃納涼。
西上人乃柳の陰にて。今此水に付そえぬ。其徳をも要め
大にして。神佛もこれをすゞしめ。旦(カツ)夕の井をも撫(ボク)も
乃ありをしらいて。百姓これおもはやうなかれし。滸(ウロ)

山あらむさて築山を見とりて嘘によそへて宮に寄して眺むる
きたまはなれたし。泉水の浄く、河南浙水乃山のかさねずすぬ。庭松
佇めの営。時にして三五乃まろ枝をみ眸をさらへ。西南乃方にまる
が草あり。庵ハ太子の作おかれ。太上乃名どころとなりぬ
杖を曳ては蘞を見て草に登る。薇ハ蘆をみずみ蘂
二さ若衛を挽く。柿庵ハ綾に遠三枚をすゝませて藤を窓
め。賓ミとし人ハ一夜ニ全からん。茶碗み抛ち。幸得選のあるにあ
なし。月に私語をとく。禅扉の穏に。堂の砌を合をき、へ。林
をかれしむ。庵に筆をまえても。樹に剣を入ず。志おの事
をかげてなわず。東ハ畑を寄て。かへ乃丸経を取わすみ色
乃旅子を拒るゝに。其ども。山蝉乃落よせしかも謂さる。呼 賀居

古。文画に儕する事二十余年。予瞻芭之陽を仰とし揚
予。梅道人が骨髄を得て。書禮乃うちに世をはなれし乃根。自
抛一条の風雅を兼む。汝世上言が舌の痕を楽て。
が心頭乃そとのひをそえて。風雅ハ見はをあらそひ。
両翁ハ郷里乃よかみ世とハ争をたがるゝ。いかさま風雅の
為に。文画をみぶみしては心をかさね。亭の芸に志を
同じうして。やく吾跡をとゞめよや。絶日樹下にて
側個に袖じらも。予に参るをみなりし。四隣乃もの驚き。以親
間乃蝶蝶のえ。髭も天下に腸を鼓じ。天元の流に
予脚を洗て物る。于時元禄五年壬申の春。二月。花蹊
蒙翁林下蠏筆

小節をかけ揺くつ蛇ハ御しれ

九老亭記

汶村

○亭あらし。九老と名ばけし。九華々何ぞや。抑九老ハ安妃(アンヒ)神仙の名なりとぞ。山に九老あり。丹に九老いふもの。会に名ある八王僕の用る処也。魏(ギ)の武帝が臺に名づく老の伴氏が家に名ばく。観あり。殿あり。帳は市が扇あれ。菊に九老乃名ありて。茶にも又此名称あれ上清茶人ハ日月を呼て太宇九華ありし。まさに白居易乃九老を以て前鶴ハ九老山人と称ま。鳥(カ)臥の亭。九々陽の楽数といふ。頃の節に

かまへしもど。義ハ壮齊乃ひらみもあらども。芳く方寸をやしなふ乃天地となく。なく暇(アンカン)に黒営浮て按かゝなじき鏡岸に東(ツウフ)ず。春楓風なずしく陣ゝしお次あや先よ。かに田かお鶏(クヰナ)老衛に敲(タヽ)くを。萩女郎もき縁細ゝして。菊が黄(キ)に挿(ハサン)さびしきなれ。池辺作次遠くそ近へ。金銀合花ちく時(ツヾタ)て至。亭外乃風猶まく与うしなど。亭ハ来る数(カス)。又以てなしをや。唐氏傘(カラカサ)味噌畳(タヽミ)ゐ一足。鶏一羽。亭あるし。又是人を迫て。近陽賦

○ト称氏汶村に述し記をとしいふ。

琵琶亭記

許六

○むかし嘉祥(かしやう)乃比。貞敏(ていびん)といふ人。三面の琵琶を唐土より
伝来。能代々に伝ておくりまゐらする。楽器(がくき)なりといへども
あるひハ犬乃名によび。又ハ田舎なとに落てハおかしき事
乃こおほし。されハ名物一面ありて。絃によりてあそぶ人なし。
湖乃縁故も。撥(ばち)絃ありしてもじきかずして関乃桜花も。膝(ひざ)
ぜよまじ。棹ハまことにしたなし。柱(ぢう)ハ四(よつ)乃湖しくをうつして。落
べきまづらひもなく。何ぞ系が枝乃そくいをもいさづけなる
べし。撥面(ばちめん)ハかしこ湖の松を思ひ兄。覆手(ふくじゆ)にハ堅田乃落
雁をうつさんかね。二絃(ふたつ)の月を出しハ八方のながめを源(りうご)

琵琶乃細きいとなみを。絃手(てんじゆ)ハ手にふれ花さくや山風に
おもふ袖をおほしみ。鶴鳴涙乃夕ぐれ袖に。秋ハあはれ
とかなしむ。あまてらす弱じ。堂にてハおさ世。倭(わ)時も落花に捨
川はし夜をおもへは。眠る時もこそ伊吹に枕をところもぞ寄
乃あるじハ許六。松原氏にしりたる人がゝ袖をも琵琶亭
と名はくぶ。むかし伯牙(はくが)がたぐふべし。鐘子期(しようしき)が耳なくて玉を
益(ゑき)なし。袖をきて人のためて。花井の錦出ハ力を
合せはよきふ世て記を閉し。宛ぶ桃乃若合。大の嘆(ゆぎ)つま衣
見をこも蜜と見るべし。

風甚水甚記

許六

四梅廬の前に風甚水甚を築く。風を涼とし。水を
月と弄ぶる所なるべし。昔の風あり。くちくに吹ども。水
鬱〻として。梅の影を浸し。峰の嵐にも吹て。ハ池
あれて荷葉を諸そかなり。主人律師風に寄しく
遊び。醉客李氏か酔て月をとらん。恐く掌に濯をこぼす
ざれバかりして名利の塵もなし。常に風雅の趣を
見座にあらハれて。風水の二を浄ふゆゑに。寺ハ首しも鎌
酒にあれど上て白る風甚に浴る衣てふくらやこて戸
篇ハ。水甚に腕を浸して風を呼ひもとの衣

あるに。帷中双角の浄に輩しく深手水陰の戦に伽
まれざ。和ども酒の二ハ右の御手を足よりめ紀てける本也跳
く。鎌ねこて。揃こず。純。吟おもしろして空に鄭に悩し従に
桐引より退きと主人ハ。楠公乃数とありく社をたまぐ下
主人ハ。猴猿と化して猴を擬て楽しむのみ。

○紀行類　五老井　許六撰

鹿嶋紀行　芭蕉

○洛の貞室。須磨の浦の月見に行て。松かげや月は
三五夜中納言といひけむ。狂夫のむかしもなつかし
きまゝに。此秋鹿嶋山乃月見んと。おもひ立事
あれば。ともなふ人ふたり。ひとりは浪客乃士。ひとりは水雲
の僧。僧はからすのごとくなる墨の衣に三衣の袋を
えりにうちかけ。出山の尊像を厨子にあがめ入て。うしろ
にせおふ。拄杖ひきならして。無門乃関もさはるものなく。
あめつちに独歩して出ぬ。今ひとりは僧にもあらず。

俗にもあらざる嵐乃名に。名をかりぬるよみ給るなるに源
平ち淀つきぬ身にて門わ秋に出て行燈と云て一部す
る身。秋をあげ袖は。馬にものせらるぞ。細脛乃ちからをつくし
さびしき山路よりわざわざ甲斐国わ。ある人の供させたる。
椅子にはかく長き笠をかぶりつゝ、いづくともなくゆく。
やうやく田舎をすぐれバかまくらの宿といへる所に出たり
あるじ。秦の始皇乃千里とや。目もあてられぬさま也。
はくじん山ふところに。二十年なれびきたりし。かの唐土の
双剣乃峯あれど今は。広山乃一隅なれ。書く
やさしき沢乃つくしきれとハ。我門人嵐雪が句
なるべくさびしき。田舎武蔵野の東をはなれける。

蟬丸なる人乃。それじ是も名つけたれ。和哥なくて
あるべしと。句なくしてあるべからず。蝶又我にも山ち姿
なりけるし。荻を袂を袖にむすび見んとやうそ。為仲
が古きに折入て。都の古き庭におもしろきに。風流なく
からず。をさなき子をこたへし。かるる谷。尾花も又袖合て
小男鹿乃つま恋ふ声。しと哀れ袖なれ。雲の駒。雨垂
ぐれよむ袖あはれ。又あは袖也。目すでに昔かたる程に。
利根川乃かはらに柵をさしいふ所に渡く。此川にて鶉の
網代といふことを許をきく。武江の市にひさく者あれ
育乃ほどじ。その漁家に入てやすらふに。寄ち宿脱し
月に雨なく晴たるかくに。出船さしくだして。康湖に

いと深き志よりハ西土に渡らんとえらぶべくもあらぬど。
椿葉におちる乃さ紀の和尚。いまハ世をのがれて山ふかよ
おもしろきとしふをやすく。庭草入て、物しぬむとこふ所
人をして深着（シンセイ）を発（ハツ）きしむと吟しきむ。志づかなる
清浄乃仏を拝むに似たれハ。暁乃ちいさき鐘をならを
和尚おもふるしの言葉ハ。人くおどろかぬおもね。月の光。西乃
空にちぎとあはなる方にしきのこむにみちてげにも
言の葉もなしぱるくしと月見に来たるがおほかりよ
しうかねすれどさなかれど。かの何かし乃女すし。附李由子
許六ぞんのすれて。ものつねうどびてしもしろはえたまは
荊懐（ナタシ）乃人なるむびし。

手をやしも梢で西を拝むなり　翁

雨に寐て行おきふる月見かな　雪石

南行ノ紀

李由
許六

○鳥ハ思く生る秋なりけり。露おびかげん毅ハあなし。登る
あるふすまも。西を志のぐ翁子。芭蕉ハあれども。今は根気
合羽（カツハ）で仕罷（ゴザ）り。術を入れれハ。草鞋一足して。天晴（アツハレ）旅人
乃出立なり。時は来二月晦日といふ日に。艶なる家を離
まじ。居者（ナヨシ）の西日一つまるうち秋おぼく。四つ辻の柳。西（ヲオ）見きこに
さ生其の旅子乃うれ白霜し。旅乃心まハなれこさらじとそれ。旅迷

路遠しと杖の紐をからげしり。首にかけたる頭陀袋。
身にそへしぬれ衣果し。其紀布山の山中に。道づれせずやと
見まはせば。神なる聖なりければ。男見よれば。角文字やいせ
の國の。ふじやまやとおもひ初やがて山の池にはく。よ
おるまゝ水風呂なり河定に河をうけし。聖は神の役よ。
兎角嬢は。あつ湯を積風呂よりは湯女のおはなを定めぬ。
我臣くのるすと見よ紀さし。それも湯女よつまで足を
〽下りとも。素読も湯女と男ま泣しぬ
〽湯まば絵日湯女なり男ぬらじと起てゆくべき西へ
もし例の一巻もとし動き神ば聖にて流まで絶
もし天氣よき夜の手まはしきるをかへて並木なる

〽ほまゝぬらるゝ近江の国の内。絵まへして
絵康出雉むしよりて。聖も起る茶。男ゐる。
〽天井(テンジヤウ)に首(かど)はしらるらく山さくら　聖
〽伊勢には馬士(ばゞ)の絵康や花田男　男
〽ト坂。山あひくるゝ雲霧の中に坂路乃跡も雅なく
ちりよるもありね。
〽鶯も竹飛どりけりや跡あし　聖
〽蓑乎りは関の地蔵てつんぐなれ。茶店をまとうし
打そとおきて。たびらを膝をうけぞれ。
〽田(か)ふやあふのくにはなく雲雀　男
たそがれたる比。宿(ツケ)ば。宿所茶屋もおほかたなし

二日。雪ふかく起て。淋しき男を起さて。旅宿を立出る。鐘

桃の紙に會津蝋燭ひらめきたる。旧形の欅乃臺

四ツとさだしをふつきまへ寺わつかる眉いふせく掬ふさ

わ。やがてもかくらに枕を築てるを正し。猪乃宿しき

つ紀乃それは古旧形役をたち梅。げまきぬき蘇下よりか

志めつきを望ハと壇より巻み出し。炎宿話に出まわ。尚指れ

宮並ハ志川をまはり。たちまちの鶴乃声。ことさら飛ぐる井

をとめけて。火縄の火気ならしとみえて。しぐれなる。紀伊

毎に。温庭均が早行も。さあらねまでハ。ほなて涼しなる

して。雲津川乃假橋を渡る。かくて。など京伊の

國より先ずわ。松阪乃矢川と。わけて人乃歯ひげる小舟。

人ちぢさ紀肩よとへバ。今ハ絶てそそのわ乃名の所をさとてよ

競ハ紀妻江口。神崎をむかし總ても。おかしねらぬき

の。是に渕ち。今は矢川となりて。人を。ふそ家のちまねまぞ。

櫛笠の紅小ハ。しれし絹のむすびを京殿茅鞋来

藩も徒よ風よ動く。今ハ室にまる番もなし。

句　松坂や御旅に比べて江かとさうら　男

句　出女乃雪むら濡く消野ト　雪

高川乃流をを跡く。代垢離の子たち。蝶乃ごとく。

浅判の鋏て。解も似たり。

句　鍛結乃揉に志らぬ梅紅　雪

山至に入りて。何かし。大史乃わしふ持く。日もくれば。来書代

みなしそむかれ。
榊神おほく宿くわ給ば。よろ川のなかハ忽(タチマチ)よ浪まさく
らしきなほ乃一すぢに涙ハおとし給ひね。

秦縄二句

青海苔(ノリ)より初ちんの塵(チリ)乃ひとつ川ハ　男

松桜川を隔てて　其乃紬　女

夫乃岩戸よ入まさバ。竹ばくかくやりし。豊闇(トコヤミ)乃ひかりを
ます紬を殊まさりかぎりなし

究竟とし天狗ハおそろし雑子物　若

法皇よ論て。御社(ヤシロ)ちかれ松乃むかう立ぶ。法(エ)羅(モ)羅(ダイ)川々
まさしく御紬御覧なハあんしとして今も石のうへよ畏(カシコミ)

里ありしをかはろばるれんこもまてらあわて又上もなく
嵐乃松風みすることをかで。小袖の麝(ハクヘ)よさハらぬるも
いましきん枕せら紬。あまりよ示きとなふ声もさ
さひそのこゝろなれ。又秦縄。

百八乃なかさ乃うら藤蕨りね　女

今そまる月日の花も旅さらる　男

つまさぬ浮名跡も墓所及ひで。すべて不思議ゆく
おそれ。二見の方もゆかしく紬どぞ。行きかよそぞし気が
おすへまかて。例乃大宮の絆よ仰まて帰ね

序

一

曠野集序　芭蕉
猿蓑序　其角
宴栁後園序　支考
近江八景序　千那
四絶文章序　李由
要文集序　許六
画樓繪合序　許六
麻生後序　許六
銀河序　芭蕉
番椒序　野坡

○序類

曠野集序　芭蕉

五老井許六選

尾陽蓬左。橿木堂主人荷兮子。集を編て名をあら野といふ。何ゆへに此名ある事をしらず。予はるかにおもひやるに。ひとゝせ此郷に旅寝せしおりおりの云捨あつめて。冬の日といふ。其日かげ相続て。春の日また世にかゞやかす。げにや衣更着・弥生の空のけしき。柳桜の錦をあらそひ。蝶鳥のをのがさまざまなる風情につきて。いさゝか實をそこなふものもあればにや。糸遊のいとかすかなる心のはしの有かなきかにたどりて。姫ゆりのなにゝもつかず

西公崔乃おほかたニよられまて。光景乃きハわかれ。道にハ乃
こゝろあるべき人ひと。此野の原を秋窓とぞ訪ねるべし。

元禄二年　孫生　書

猿蓑序

其角

誹諧乃集つくる事。古今にしかるまで。此道乃おこりて起
るべき時なれや。幻術乃第一として。其句に魂の入ざれバ夢
にゆめみるに似たるべし。久しく世にとゞまり。長く人に
うつりて。不變の變をしらしむ。五徳ハいふに及ばず心を
こめて句をつくるべき事しかなれ。彼西行上人の骨を拾ひて人を作りて
まをこしなるハ聲ハわれたる笛を吹やうになむ侍るとや申され
ける。人にハ成て侍れども。五の聲のわかれざるハ。反魂乃
法乃おろそかに侍るにや。さればたましゐの入たらバアイ
ウエヲよくひゞきて。いかならん吟声も出ぬべし。只誹
諧に魂の入たらんとて。我翁行脚のころ。伊賀越
しける山中にて。猿に小蓑をきせて。誹諧の神を
入たまひけれバ。たちまち断腸のおもひを叫びけむ。
あだに懼るべき幻術なり。これを元として此集を作て
猿蓑とハ名づけ申されける。是が序もその心を
とりて魂を合せて。去来凡兆のほしげなるにまかせ
て序す。

婁元柳ノ花園ノ序

支考

世にあそぶ人ありて。綾ナ羅錦繍にそのしふ時々。楽つきて
花をおもしひとのなし。山林樹下にあそぶことは心にそゝ
ざれバ。世にうらやむとも。わきまへしらじぬらし乃きりには
みしらざるをおもんにて天遊ありとぞ。むかし楽人もいづれも
されバ柳花生を何ぞし。一壺乃友をあつめて。花をあそぶ
るの日あるぞ。額には閑乃一字を題して。志のなしる時節
様になしやかましき時々さりさ酒に至て。此時の心に
はひをりたるだの窮人がかや侍つきりむ。此日ふむも情を
此中にあそぶべく。今ぞ酒のうむと偲しくるにんし

あらさとる先。ほふ案情をいふ人あらバ。罰ハ金谷の酒にし
うるむ。俳諧に楽じ人そ依時くぞ。たまわとしふこともして
くさ先さらせむしとそそらふに花きりれ。

近江八景序

千那

近江八景ハ。瀟湘の絶景をあつむ。ひとへに堅田よりこ毎
石山によせらるも。要は章法をえん話し。勢田夕照を
合せ。瀟湘乃八景によそへ。八乃景を定むる也りと
ぞ。永禄ノ比。仲秋の月に楽しみて。近衛乃政家公。石
山寺にあそびつる時。ともし先ての景を詠ぞ。すべて此
あくの八景。清寺説山なる十境。取まじんといふるなし。

さまざま此湖上乃八景(キツ)に並ぶ詩をえらんで一へしけれ。八乃詩歌をあつめて何事ぞと。俳諧の八景ある事を笑ぞ。さる程ハ近江八景をあつめ人がよしとて。絵を老子が筆をまつりて置ハまさに黒田の痴老の秋景をはしめ。自他善境乃俳を集てかつて近江八景の一軸となし。一紙を印しめ是に自序を加へて江州の産蒲萄(ブダウ)坊の主人傳千那筆をもて補ふ乃東軒にしるす。

四絶文章序

李由

許氏が家に四絶あり。絶ハ絶勝の義なるべし。ひとつにハ艸字(カウジ)蔵(イウ)。二にハ揚揮(ヤウキ)豆(タウ)。三にハ花園(クハヱン)。四にハ紫芝見(カヲ)なるべし。家門(カウ)するにあらし。四には濱の四句上にあるや四不遠(ズヰ)四海出て四におるをハ。四時四月の四なるべしや曰。不遠四恩四教の四によるへしやハ。四民四姓乃四の教ましまるや。曰。不遠四天四睡乃四を称かんハ。四王四皓の四をとうやむ。曰。不遠。恂(ヲリ)死として問(トヒ)をやめさせわ。許子が曰。分別迷腐ハ愚痴(グチ)にあるぞ。若三絶ハ絶の掠蔵あり。ハ吾子が義用ハあちこちにかる遠すべし。ちちて一二三四の中中にあるを称バ四絶と名つけ此也。愚(オロカ)なる法師あり。若才かしく法名の文字にくるしみて。あるへをしへて。云まいげ法名一字をかしらに置かへかしめて。ただいろはを以て付くべしと法師おもわちかへを悦て。やかて法以(ホイ)法呂と。

喚くに名づけて。おほよそ二乃篇によりて。中六の章にあら
まうを附にかゝりきを賣者すみわて。清名をうへともへども法六
と改名して。やうやうことを始。妻子ちくかゝれしば。これをとゞ
は世の業ハ是非なしで。先て来世をまぬく時は。其意をと
まもをころへと。いへども。傍ぎかしら我物をて。家清名ハむ乃年く
ならハあらがら今六の当書をよへ是非なしとて。終に清蔵
なりして読をぬ。今予が四絶も。かくなぞらしとおのく
これを感じて。説。賊。銘。賛乃四文を書して。終に
発志ちとくも。其中一段に一章をくうへ。おそらく
をつ絶となしんでを知ぐ。やぐて四文章乃始に序し
てぎんをのべく。此罪をおがらじの。

【要文集序】

許六

○逢坂山乃杉に皇みて小鳥どもの清む。絶くと鵯ばかり浣の
是をわかれ枝小□の本てをりきるしくきぞ鳴きる。百舌乃ならわ
く。よおのか一夢のおよがいわくるを声もきくりあり。鳥まね
かあしくと吟筆し。雀のちかしと囚しるの鵯るに飽ず
やあわき禰ぎるとりけ。清も鍾よむちうぞ。かあしくちかく
まりぞが物志わくる数つまでうおりしられ。を数つまき
まそも囚しるそれ鵯るにイヤヲカノぶくし。所也しの
かりわめやあまをきむりし。よくぞけまをなるるもわこりしまた
鸚鵡といふ鳥ハ人のいふをよく真似きる。ゆゑに流て

て也。彩色を学ぶ者は。父母。爺。口。鼻をよくぞ書すれば
なるは世にある事は紙ばかりにて似たるぞ。かゝる事も一つ筆を。
まじはるとしるべし。父母乃見るも書べき事もなくて。
此学者読書の志を似を求絶として一生飾代に書る
もいふ者のまへをもなし。筆ぞさりとしらべしも書は
書る絵筆にある事なれる画の八百。二つ筆を継の
言を乏とおほしてまふせる書付ある物事文集
とぞ申給ふ也。

画楼繪合序

許六

○和翁乃ことしへ絵かく人の中に。不難に家を焼て不動尊
乃妙なる事をふるひ。ある人他の家に起き。漢土の画工人々
画家乃名をおまる人もあらざれば。当世の風俗にあつ流
まくれし。布袋。福禄寿の二幅をおほして。あれ画ゆ
乃一列に入ず手となかりしれむ。何ず一幅に人物と
おしへ。次に筆法をあらはれ。唐土乃名ある人々。楼を造りて
人を禁ぜず。起て怒りれ。おのが精神を画きて。
猫を怒り紀て鼠を絶をもむべなるらむ。且つ画楼を造
らむとするぞえ。しかるに。さまざま流行老荘によつて絵事を
志ほ稀也。一名の中。其異の二七月八ツ蜂の巣をはじめ。
ころをもて思ひくしなし。秋の三月ら。れ凍。筆とかゞ
まで思ひくしなし。是を一とせ十二月乃標字とさだむ。

於雷雨閑窓ハ。一日の勝事也。又私のいとまをぬすみ
花に旅し。山に戯ぶ。月を惜み雪を吟じて。又
恵くはまくれし。此画しき閑の日あらく点をと
扇をうけし。或を吸附例の新宮入るまじ。あるは
雨吟。酒飲。炭火をかうばしく。此果を花鱗が生写
しにあはく果をくし。一年の交に。類に画様を造るおやまき
さ言に縁。なるあの紙て。落書きに書乃かしきを被
くふまし。蕃井あらずなる日も様に乃白みをすなほも旅に
こま於へ。其て緒をぬひ附きて先て其詞あれど。筆きき
。二三会乃暁を期をとも約して。明る。次の日来て。やや
左て乃罪を責人む。予か懐によするも人一生せおりくるを

さらむと。一生一度ての罪をうけ給え。予其をぬし絵をゑがく
此はに恵まを。はまりとは是れ陳人はへかやし。二三年にる下る只
年あ也。其年絵る所なて七年乃月日也。於予も画魔乃
附寄れとさへし。一様に內かれも六人ふじを採く。今
物山水花鳥をうつさむ。各一軸を懐にして左右に列る。
京で予勝手顔を寫ふ。此撰にものて何人まく取りかれる。
二種を画様の絵合と呼ぶ。様にさきて大井。許子六自
扇作りてふきる。鄭云が標す教すして老画師と
称せるのみ。于時元禄壬午の冬。十一月日書之くる

麻生序　許六

○麻生(アサフ)の名を。烏帽子(エボシ)折(ヲリ)ともいふなり。好(スキ)に和(ワ)烏帽子
と同じ心の釈なるべし。すべて世に好(スキ)嬌(キラ)びの
二字(フタヂ)より流出たなく。天地果物のさびしきもなき所を
嫌(キラ)ひとして人は此の好(スキ)なりけりは世にもならはしより起りて。
後京極殿は常の咄の中にも好(スキ)の事。俊成卿の詞(カヅラ)を
寂蓮法師の枕の夕暮は。只色は侍るべし。桃と
いへども桃隣なきは好わ。翁も黒(コヽ)弱(ニヤク)をすかれさいは
精進色の御法に及べし。晋子が傾城子。阿山人が
出女ちぎり夕刈して。名残毛の柿乃(ヘタ)の字おはいてまは

未練(ミレン)も乃ちは帝と同じ。其は物カキクケコなるべし
今の人は。好(スキ)は。ぬるきに烏帽子の。あらん
事を発明しければ。さは拙老の此言も柳おほひの
人なれば。柳の荒き事をも。此集に直すべし也
俳諧大宗士跋とす。

銀河序　芭蕉

○北陸道に行脚して。越後の国出雲崎といふ所に泊る。
彼佐渡がしまは海の面十八里。滄波を隔て東西三
十五里によこおりふしたり。峯の険難谷の隈(クマ)々
まで。さすがに手にとるばかりあざやかにみわたさる。

むべ此嶋は黄金おほく出て。あまねく世の宝となれ
ば。限りなき目出度嶋にて侍る也。大罪朝敵のたぐ
ひ。遠流せらるゝによりて。たゞおそろしき名の聞え
あるも。本意なき事に思ひて。窓押開きて。暫時
の旅愁をいたはらむとするほど。日既に海に沈で。
月ほのくらく。銀河半天にかゝりて。星きらきらと
冴たるに。沖のかたより波の音しばしばはこびて。
たましゐけづるがごとく。腸ちぎれて。そゞろに
かなしびきたれば。草の枕も定まらず。墨の袂なに
ゆへとはなくて。しぼるばかりになむ侍る。
　あら海や佐渡に横たふ天の川

蕃椒序

野坡

たうがらしの名を。南蛮がらしといへるぞ。かまが浦世。南
蛮よりくだりしからしといへり。又詳酸漿子。天竺きゝ。實え
八ツなりなるもあり。いづるもあり。おのがかまへもちをぬめ唐人の髭
びくびくするなるべし。皆やさしくもしらぬ名目は。海が六十四
かくする物は。天資の性の物ざらしておもむべしぞ
かまがおもしろうほや。石臺におきし物く。竹縁の端乃
くまにあるは。上にもおかれ住合なれど。とすれば。雷鉢の目衣
ゆまき河豚に培まで。世にもちの。二階のつまよ。おもしろしかな
鬼灯をきさにめ侍るも。あやうきもつくり侍るを。朝鮮のしる荒

そらにハ論もしおもわ隠太りさハかつら鬚つり鬚乃益
脇ほかしつゝもて貧乏樽の口ぼうつゝみされとなるも。
不食せず業者附。ふ帰これむさき枕。おほくハ奴僕豆腐の
味おなふのことを好みけるを業もの最上とせうて。かくハ其
ごあるへ小田原道の商ふ店のまくの色ある小帰る。よ二へ一
西られべし此かまとしてもみのかし紙。下戸をもしらす
あることやへで。此中ならべよりもあらぬ志りし。今ハ
人々へ口は世をさつきつけハ此よしなとも知るへし。
などかうき月を見るへうそとし。小序をとゞむ事。
戯墨を記して禿やや唐辛子